

不思議な誕生プレゼント

奨励	山本 真司〔やまもと・しんじ〕
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校教諭・チャブレン

そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、皆の前で踊りをおどり、ヘロデを喜ばせた。それで彼は娘に、「願うものは何でもやろう」と誓って約束した。すると、娘は母親に唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行って報告した。

(マタイによる福音書 14章1―12節)

待つことができない

この時期になりますと毎年さまざまなランキングが発表されます。流行語大賞や今年の漢字など是有名ですが、次のランキングは何かお分かりでしょうか。

第1位 シンガポール 10.55 第2位 コペンハーゲン 10.82 第3位 マドリッド 10.89 第4位 広州 10.94 第5位 ダブリン 11.03 (20mを何秒で歩くかの秒数)

いかがでしょうか。よほどこのことに興味がおありか、どこかでご覧になっていなければ、おそらく想像できないと思います。

では、このランキングを国内だけに限定しましょう。

第5位 名古屋 1.48 第4位 松江 1.5 第3位 長野 1.53 第2位 東京 1.56 そして堂々の第1位は 大阪 1.6 (秒速/m)

このデータは国際交通安全学会の国際交通安全学会誌5巻4号に掲載されています。正解は、世界で一番の歩行速度で移動する人びとの主要都市はどこか、というデータです。うちの浪速っ子、せっかちの江戸っ子とはよく言ったものですが、世界的に見るとそうでもないことが分かります。今回の調査結果から、90年代初期に比べ3割くらい歩行速度が上昇していることが統計的に分かったということです。これは、メールを送信して10分も返信がなかったら、どうしたのか、と急かすような今の文化を象徴しているのかもしれない。

ちなみに、便利になった世の中、何かにつけて待ち時間が減っているというのです。中高生の間で携帯電話メールの「5分以内返信」が暗黙のルールとなりつつあり、それが中高生のみならず、大人も同じ状況なのだそうです。さらには電車や病院、レストランなどでも「待てない人」が急増していると産経新聞が報じていました。メールを送って5分間返信がないとイライラし、貧乏ゆすりを始める人、地下鉄に乗ると一駅ごとにメールの問い合わせをする人を紹介しています。これはすべて成人で、小中学生に至っては「15分以内に返信がなければ友だちではない」のだとか。携帯電話に縛られる人についてはさまざまなメディアで言及しているので、いささ驚くことではないでしょう。

また、シチズン・ホールディングスが2003年に首都圏のビジネス・パーソン400人を対象に調査をしたら、イライラする待ち時間のリミットとして、通勤電車の遅延が5分、総合病院が30分、スーパーやコンビニエンスストアのレジが3分、パソコンが立ち上がるまで1分、インターネットのコンテンツにつながるまでが10秒という回答が最も多かったそうです。特に通勤電車の遅れが5分でイライラするというのは、10年前と比べて3倍以上になっているとか。

それだけでなく、ゆったり落ち着いて味わうはずの懷石料理の店でも、料理が出てくるまでの10分や15分が待てずに苦情が出ているそうで、テーブルセッティングのために1、2分待ってほしいという店の申し出に「待てるか!」と怒って帰ってしまう中年男性もいたのだとか。「スローフード」が見直されている昨今ですが、食べるほうが求めているとしたら、スローフードもファーストフード化してしまいそうだと、この記事は締めくくっています。

「江戸っ子はせっかち」説の証明に、屋台が発祥の江戸前寿司や天ぷら、そばなどはファーストフードの走りだとしたら、気が短い江戸っ子にとっては今のハンバーガーやコンビニのおにぎり並に便利なものだったのかもしれない。

錯覚と実体

今、キリスト教のカレンダーでは待降節と申しまして、救い主の誕生を待つ期間ですが、これほど待つことができない人たちが増えているということは、悠長に救い主を待つような信仰は到底受け入れられないのかもしれないかもしれません。さらに、この信仰はご利益がはっきりしない、五感で確認することができない神を中心に構成されているのです。しかし、歩みを止めて、少し冷静になって考えてみると私たちの五感はそのような正確なものなのかという疑問に囚われます。「百聞は一見にしかず」、seeing is believingとはいいうものの本当にそうでしょうか。ものごとを直接見ると本当にその本質や特性が分かるのでしょうか。哲学ではなくて、実体験として、私たちはさまざまなイリュージョンのなかに生きているのではないのでしょうか。実験心理学を専門とされている一川誠さんが書かれた『錯覚―知覚の謎を解く』（集英社新書）を読みました。「実際のところ、私たちの眼は観察の対象の特性を捉える上で、それほど正確ではないし、無条件に信用できるものではない。耳も同様である。私たちが聞いている内容は、実際に生じた事柄と必ずしも一致していない。むしろ、見たり聞いたりの対象の実際とは異なっていることの方が多いかもしれない」というのです。改めて言われてみるとたとえば、これは運動錯視というのだそうですが、子供のころから「グニャグニャ鉛筆」しませんでしたか。ラバー・ペンシル錯視と名付けられています。運動をされる方はしばしば審判が誤審することに疑問をもたれるかもしれません。その道のプロが間違えるとは訓練が足りないのではないのかと思うでしょう。テニスでラインの内か外か、サッカーのオフサイド、野球のファールかフェアか、微妙な判定がなされることがあります。実はこれも錯視や錯覚で理解できるようです。では、実体とは何か、それが今日の課題です。

二つの贈り物

クリスマスといえば、クリスマス・ツリー、サンタクロース、そしてプレゼントです。日本の多くの人たちが一瞬キリストの誕生を祝ってくださる貴重なできごとです。聖書には黄金・乳香・没薬という贈り物が有名ですが、今日はおどろおどろしい不思議な贈り物の意味を考えてみたいと思います。

ここに登場する少女、この少女の名前をご存じでしょうか。そうです、サロメなのです。ところが、このテキストにはサロメという名前は出てまいりません。サロメが登場するのはマルコによる福音書に2回、十字架につけられたイエスのそばにいて、「そしてサロメがいた」（15章40節）。復活の日「サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った」（16章1節）。この描写に登場するだけなのです。どうして、ヨハネの首をとヘロデに願った少女がサロメなのか、これは文化的錯覚なのではないでしょうか。

私たちがよく知っているサロメはオスカー・ワイルドのサロメであり、リヒャルト・シュトラウスの「7つのヴェールの踊り」を演じるサロメだろうと思います。古代ユダヤ史をかじると、フラウィウス・ヨセフスがその著書『ユダヤ古代誌』（93年―94年頃完成）第18巻5章4節で、記したサロメに出会います。

「しかし、彼らの姉妹のヘロディアは、ヘロデ大王の息子で、高位の祭司シモンの娘のマリアムネが生んだヘロデ〔・ボエートス〕と結婚し、サロメという娘ひとりをもうけた。娘が生まれた後、これはわが国の律法の相容れぬことであるが、娘を連れて、夫が存命であるにもかかわらず離婚して、ヘロデ〔・アンティパス〕と結婚した。彼は前夫の異母兄弟であり、ガリラヤの四分封領主であった。さて、その娘サロメはヘロデ〔大王〕の子でトラコニティスの分封領主であるフィリッポと結婚したが、子が出来ないうちに彼は死んだ。ヘロデ〔大王〕の子で、アンティパスの兄弟であるアリストブラスが彼女と結婚した。二人には、ヘロデ、アグリッパ、アリストブラスの三人の息子がうまれた。これらは、ファサエラスとサランピシオの子孫である（後略）」。

ほかに絵画の世界では枚挙に暇がないほどにテーマになっています。

では、この残忍な褒美の意味は何なのでしょう。イエスの誕生は決して豊かな祝福されたものではなかったことは、聖書の記述を見ると分かります。救い主の誕生をことさら悲劇的に伝承することが現実と信仰との格差、ギャップに苦しむ人びとの魂を生き返らせたのではないだろうかと思うのです。その日を暮すことに不安を感じる多くの人びとへの幼い、弱い贈り物に対して、宮廷では人の命が贈り物として扱われている、この途方もない落差こそが私たちの世界の現実なのではないでしょうか。命の奪い合いが続く世界に生きる私たちが立ち止まって真摯に問うべき現実がこの物語に凝縮されているのだと思うのです。

救い主の降誕は日常に隠されている錯覚を思い起こす機会なのです。何が大切な事柄なのか、何を大切にしなければならないのか、しっかりと本質を見極めるものでありたいと思います。